

日本光学会の新たな船出を祝して

公益社団法人応用物理学会会長 河田 聡
(大阪大学)



82年前に発刊された「応用物理」の創刊号は長岡半太郎氏の「発刊の辭」から始まり、本多光一郎氏、大河内正敏氏のメッセージへと続く。長岡氏の文章はマクスウェルの電磁気学がヘルツの電波実験に応用され、無線通信、ラジオ、そして写真電送にまで応用されたこと、真空放電がX線の発見につながりそれが医学を進歩させたこと、そしてマイケルソン干渉計の測長、ファラデーの電磁誘導などへと進む。ここまで読めば気付かれるだろう。当時の応用物理学とはまさに「光学」であったのである。「応用物理」を発刊したのは「応用物理懇話会」であった。その懇話会が「学会」と名称を変更して、その中に「光学懇話会」が分科会として設立された。私が入会したのは光学懇話会であり、光学論文賞をいただいたのも光学懇話会からであった。

1989年に名称が分科会・日本光学会に変更された。私は関わっていないので当時のいきさつについてはわからないが、今でもよく覚えていることは、岩手での応物学会(1990年)のある夜、辻内先生、一岡先生、山口先生ほか、当時の光学のリーダーが集まられた会の末席に座ったことである。「応物学会は大きすぎて分野が広すぎて、予稿集が厚すぎる」「セッションが多すぎて、光学の人たちが集まって議論する場所がない」「ソサエティー制にできないものだろうか」などの話が出た。そして翌1991年の岡山での応物学会終了後、海を渡って高松で光学連合シンポジウムが開催された。このときは招待講演だけの会合であったが、当時の池田幹事長の下で議論を重ねて、翌1992年には大阪(関西大学)での応物学会の後、一般講演主体の光学連合シンポジウムが京都で開催された。今の「OPJ (Optics & Photonics Japan)」の発端である。

その後も応物学会はソサエティー制になることはなく、光学懇話会は分科会のままで学会を名乗るという不思議な

形態が続いた。1999年の大阪でのOPJをお世話したとき、私は他の光関連学会との関係について議論するパネルディスカッションを開いた。2006年のOPJでは、日本分光学会の会長として招待を受け、光学と分光学の違いを運動量保存則とエネルギー保存則の違いに比して講演した。

応物学会は公益社団法人となり、法人として、より責任あるガバナンスが求められるようになった。科学技術のグローバル化が急速に進み、海外学会との交流が活発化してきた。分科会としての光学会の活動には、限界が生じてきたかもしれない。応用物理学会の会長として私が会員、理事会、事務局に繰り返し伝えているメッセージは、学会の diversity と dynamism である¹⁾。科学と技術は常に変化し進化し、多様化する²⁾。新しい discipline が応物学会から生まれ、新たな学会が応物学会から育つことは好ましいことである。ただし、これが科学技術の縦割り・細分化への道であってはならないとも思う。伝統という言葉によって惰性に押し潰されたり、閉じこもってしまうことがあってはならない。学問も学会も生きている。さらなる再編や改廃があってもよいと思う。

応物学会は昨年の秋から講演会の大分類の「光」「量エレ」「光エレ」を統合した。今春には半導体の「A」「B」も統合する。そして次々と新しい分類が生まれることを促している。光学懇話会以来の歴史ある光学の分科会は「フォトニクス分科会」と名称を変更し、より応用物理学的な光の研究者の集まりへと発展していくことであろう。2つの学会が知恵を出し合って、互いに協力し合いかつ競い合って、日本と世界の光学に貢献することを期待して止まない。

文 献

- 1) 河田 聡：“Diversity と Dynamism が応物の未来を創る”，応用物理，**82** (2013) 653-656.
- 2) 河田 聡：“学会進化論と遺伝子”，応用物理，**83** (2014) i-iv.